

教養総合「中世都市クラクフとアウシュヴィッツ ＝ビルケナウ強制収容所」実践報告

——地歴公民科との連動性に注目して——

山 村 和 世⁽¹⁾

〈キーワード〉地歴公民科との連動 ダークツーリズム ホロコースト 現代ポーランド

0. はじめに

高2教養総合「中世都市クラクフとアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」は、2018年の教養総合科目のスタートとともに設置され、2022年度まで5年間継続して実施された、地歴公民科・本稿執筆者（山村）と英語科・窪田史教諭による教科横断型授業である⁽²⁾。窪田教諭はポーランドへの短期語学留学経験をいかしてポーランド語・ポーランド文化を担当し、山村は地歴公民科との連動を意識した授業内容を展開してきた。

しかし2020年度秋以降、COVID-19の影響によって、ポーランド研究旅行の催行は中止が続くこととなった⁽³⁾。2022年度には隣国ウクライナにロシアが軍事侵攻し、そこでもいくつかの問題が生じた。これらの諸情勢をふまえて、教育研究旅行の継続は困難であると判断し、2022年度をもって講座をいったん閉じることが決定された。

毎年70人弱の生徒が参加した本講座をつうじて、これまで約200名の本校生徒がポーランドを訪れている⁽⁴⁾。そこにはホロコーストの現場を訪れるという、日本の高校生にとって貴重な経験も含まれている。パンデミックの影響をこうむった年度の参加生徒も、オンラインツアーやオンライン講演などで特色ある学習を進めてきた。以上をふまえて、執筆者の視点——地歴公民科との運動性——という限られた観点ではあるものの、本講座での5年間の成果をここでいったん共有することを試みたい。

以下では、読みやすさを考えて、研究旅行を旅行記風に再構成する節を設けている。現地フィールドワークでの体験と地歴公民科と連動する問題関心の醸成をどのように図っているのか、授業内容を中心に叙述しながら、講座内容について振り返っていきたい。

1. ポーランドへと出発する

1－1. ポーランドに出発する——1 日目の旅程（旅行記風に）

中附生は羽田空港に 9 時 30 分に集合。12 時 35 分発のルフトハンザ航空で、まずは経由地のミュンヘン・フランツ・ヨーゼフ・シュトラウス空港に向かう（所要時間 12h10m）。このドイツが記念すべき、初海外の国という友人もいる。乗継ぎの休憩時間（4h30m）をうまく使って、ユーロでソーセージを買って食べる姿もちらほら。その後、ふたたびルフトハンザ航空でクラクフに移動（1h20m）。クラクフ空港（ヨハネ・パウロ 2 世国際空港）に到着後は、30 分ほどバスに乗ってホテルに向かう。



乗継ぎの休憩時間

ようやく着いたポーランドではあるが、羽田空港の集合時間からすでに計 21 時間が経過している。北緯 50 度、東経 20 度のクラクフは、サマータイムであれば時差は 7 時間だ（通常時は 8 時間）。現地は午前 0 時、日本時間では早朝 7 時。空港でスーツケースを受け取る頃には眠気と疲労でくたくただ。明朝の集合はホテルのロビーで、少し余裕をもって現地時間午前 10 時。とにかく早くベッドで眠りたい。



ドイツでソーセージを食べる

1－2. 現地での観察力を磨く

「地理」「政治経済」との連関

東欧への海外フィールドワークという貴重な機会を活用することで、「地理」「政治経済」との有機的な結びつきをめざすことは、本講座の眼目のひとつである。1 学期の授業では、まずポーランド共和国についての基本情報をあつかう。その内容は、ポーランドの人口規模（3,840 万人）、老年人口率（15%）、面積（31.3 万 km²）、民族構成（西スラブ系のポーランド人が 93.5%）といった地理的観点である。そのねらいは、現地に赴くプロセスでの観察力を磨くことにほかならない。

ポーランドの国名の語源は pole（野原・畑）であるともいわれる。実際、バスの窓からはなだらかな平原が広がる。この地形はポーランドの歴史にも深く影響している。

ポーランドは歴史上、何度も、騎馬隊や戦車隊によって侵略を受けてきた。大平原に広がるこの国は、南をカルパチア山脈の北端に遮られ、北をバルト海で閉ざされ、ヨーロッパに戦争が起こるとき、必ず戦場と化す宿命を負っている。南はカルパチア山脈でチェコ、

スロヴァキアと、西はオーデル・ナイセ川でドイツと、北はバルト海で北欧の国々と、そして東は深い森と平原の中に述べる一本の線（いわゆるカーゾン線）で、旧ソ連の共和国であったリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ、そしてロシアの飛び地と接している。（沼野編 1996:53-54）

授業では、ポーランド空港名についても、あらかじめ注意を促している。フレデリック・ショパン空港（ワルシャワ）、ヨハネ・パウロ2世国際空港（クラクフ）、グダンスク・レフ・ワレサ空港（グダンスク）など。実際、クラクフ空港では1978年に（450年ぶりに非イタリア人の）ローマ教皇となったヨハネ・パウロ2世関連の土産物が名物となっている。それぞれの人物が、ポーランドのナショナル・アイデンティティにとってどのような意味を持っているのか、身近な観察から歴史・文化への考察を深めることができる。

旧社会主義国ポーランド

現地に着いた夜には、自由時間を活用して、有志で近所のスーパーマーケットに向かう。ポーランドの一人当たりGDPは1万2300ドル（日本は3万8700ドル）で、決して高くはない。ドイツでの空港の買い物と比較すれば、ポーランドの物価の安さはいっそう際立つ。そしてそのことは、第二次世界大戦後、ポーランドが東側諸国に位置づけられ、社会主義国としての道を歩んだ歴史と無関係ではない。

授業では、アンジェイ・ワイダ監督『ワレサ 連帯の男』（2013）を視聴し、「連帯」によって東側で初の非社会主義政権が樹立されるにいたった、第二次世界大戦後のポーランド史についても取り上げている。ソビエト連邦の支配圏に入った旧社会主義国のポーランドと、在日米軍基地の問題を抱える日本とを比較した場合、どのような歴史的知見が切り拓かれるだろうか——ここにも「政治・経済」との関連において、興味深い比較の視点が隠されている。



スーパーでの買い物 1



スーパーでの買い物 2

2. ヨーロッパの中世都市を体感する

2-1. クラクフ旧市街を歩く（旅行記風に）——2日目の旅程

朝 10 時、ポーランド人日本語ガイド 2 名とともにホテルを出発する。クラクフ旧市街までは徒歩で 20 ～ 30 分だ。10 月のクラクフは、雨天だとかなり寒くなることもある。しかし旧市街に入る前から、木々が黄色く色づいたヨーロッパの美しい街並みに、気持ちは盛り上がる一方だ。旧市街までの道のりはコペルニクス通りの名称がついている。



コペルニクス通り



バルバカン砦



フロリアンスカ門〔③〕をくぐる



背後にフロリアンスカ門

とうとう旧市街入り口のフロリアンスカ門に到着する。門の目前には、中世の威容が漂うバルバカンの砦も残る。ガイドさんの解説を聞きながら中央広場に到着したのは 11 時すぎ。1 時間ごとに鳴り響く聖マリア教会のラッパが聞こえてくる。これは 13 世紀のモンゴル襲来伝説に由来するものだ。

ファイト・シュトスの傑作祭壇画でも有名な聖マリア教会を訪れる。ステンドグラスの美しさは圧巻だ。中央市場広場のシンボルである教会の前で記念撮影をする。



聖マリア教会〔⑨〕



聖マリア教会内の磔刑像

2-2. キリスト教世界に触れる

中世都市クラクフ

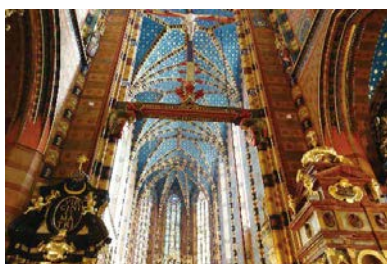
比較文学研究者の関口時正は、エッセイ「クラクフ——月の都あるいはネクロポリア」において、クラクフの街を次のように描写する。

今日でも、クラクフの町を歩く者の目をひきつけるのは、おびただしい教会である。……半時もあれば横断できる、小さく、閉じられた市街の構造は完全に中世のものである（関口 2014:258）

ヨーロッパ中世都市を肌で味わううえで、クラクフの街歩きは魅力的なものである。1978年の世界文化遺産登録、1989年の東欧革命などを経て、観光地としての街づくりも進み、このエッセイ執筆当時とは街の雰囲気も様変わりしている。とはいえ、フロリアンスカ門からクロツカ通りをへて、王の道をたどり、ヴィスワ川沿いのヴァヴェル城までの道のりは、コンパクトかつ文化的刺激に富んだものだ。



本稿写真の〔 〕内標記は上記番号と対応
出典：関口（2014：257）



交差リブヴォルト（聖マリア教会）



中央市場広場と織物会館〔2〕



ヴァヴェル城〔15〕



ヴィスワ川〔17〕

10世紀のピャスト朝に始まるポーランド王朝は、その創始者ミェシュコ1世（在位960頃～992）の代からカトリックに改宗し（966）、神聖ローマ帝国との結びつきを得た。現在でも、ポーランドにおけるカトリック信仰は篤く、クリスマスには旧市街の店は閉じ、夕食は鯉料理を食べる習わしがある（近隣には鯉の養殖池があり、クリスマスまで家庭の風呂桶で鯉を泳がしておくらしい）。93.5%がスラブ系の民族構成であるにもかかわらずギリシア正教ではなく、カトリックが信仰されるという文化的特徴はたいへん興味深い。スラブ系民族にもかかわらずキリル文字が使用されないことと同様に特異な点である。

「世界史」との接点

関口も述べる「おびただしい教会」群には、ロマネスク様式である聖アンドルー教会、主としてゴシック様式である聖マリア教会などが含まれる。全員で見学する聖マリア教会の内部構造は、ステンドグラスやキリストの磔刑像など荘厳さに満ち、まばゆいほどの美しさである。建築様式としては、ロマネスク様式・ゴシック様式・バロック様式・ルネサンス様式の各様式を味わうことができる。



教会内の見学



旧市庁舎の窓から



聖アンドルー教会〔13〕



ヴァヴェル大聖堂〔15〕



ルネサンス様式のヴァヴェル城〔15〕

このようなキリスト教世界としてのポーランド中世史は、クレルモン公会議（1095）におけるウルアヌス2世の呼びかけに始まる「十字軍」と、13世紀に世界に拡大する「モンゴル帝国」の二項目において、高校世界史とも接点をもつ。

第3回十字軍遠征（1190）を契機として創設されたドイツ騎士団は、高校世界史の授業でもかならず触れられる項目である。ドイツ騎士団はのちにヴィスワ川流域で独立都市を築き、ポーランドをつねに圧迫する勢力となった。また、ポーランド王朝のもうひとつの宿敵がモンゴル勢力である。チンギス＝ハンの孫バトゥがキプチャク草原を制圧し、キエフ公国などのスラブ系諸侯を服属させたのは13世紀であった。二度にわたる元寇（文永・弘安の役）と同じ世紀の出来事であるといえ、日本史の知識とも有機的に関連するだろう。

クラクフの街歩きの最中、聖マリア教会から一時間おきに流れるラッパのメロディーは、途中で不自然に休止する。それは街を守護した見張り隊が、襲来したモンゴル軍の弓矢で命を落としたとする伝説に由来している（Iwanski 2016）。1学期の事前授業では、このようなポーランドの伝承も多く取り上げる。世界史であつかわれる事項が、街歩きのなかで、そのまま身近に感じとれるのがクラクフの旧市街地である。

2－3. クラクフ大学からヴァヴェル城へ（旅行記風に）——2日目の旅程

中央市場広場から5分ほど歩いて、ポーランドでもトップレベルのクラクフ大学（ヤゲウォ大学）に向かう。中世の大学の雰囲気 が濃厚に漂うクラクフ大学は、コペルニクスも学んだ場所だ。コペルニクス像の前でガイドさんの話をうかがう。20世紀のクラクフ大学を舞台とする、ナチスによる知識人迫害のエピソードも教えていただく。



ヤゲウォ大学〔⑦〕

ガイドさんはとても博識で日本語も上手だ。マグダレーナさんもアンナさんも、クラクフ大学で東洋学を学んだらしい。マグダレーナさんが日本に関心を持ったのは、『美少女戦士セーラームーン』がきっかけだったとか。その後、レストランでサラダとロールキャベツとチョコレートケーキを美味しくいただく。朝食のバイキングもポーランド独特の料理があって美味しかった。



昼食はロールキャベツ

昼食後、ゴシック様式・ルネサンス様式が混在するヴァヴェル城・ヴァヴェル大聖堂に向かう。内部を2時間ほどかけて見学する。

これらはルネサンス期にヤゲウォ朝ジグムント1世・2世によって改築された豪壮な建築物で、城内には巨大なタペストリー、ルーベンスによる肖像画、ボッティチェルリの油絵などがある。ルーベンスの絵がある部屋は、壁紙に皮革が貼られており、全体的に黒っぽい印象だ。ガイドさんによると唯一のバロック様式の部屋らしい。中世クラクフの街に暮らす人々の首の像がぶら下がった部屋があり、とりわけ印象的だった。

ヴァヴェル城の豪勢なタペストリーは、古くからクラクフの人々の誇りだったという。その中には18世紀ポーランド分割でロシアに掠奪されたものが含まれる。強奪の際に切り刻まれた痛々しい傷跡が、修復されずにわざと残されている作品もあった。

ヴァヴェル城・大聖堂の見学を終えて坂を下ると、入城時にも見えた愛国者コシュエシコ（1746～1817）の像がふたたび目に入った。周知のとおり、コシュエシコは、18世紀のポーランド分割に抵抗した伝説的な国の英雄である。さらにヴァヴェル城の城壁の下に降り、ヴィスワ河のほとりに立つと、ここにもクラクフの著名な伝説の主がいた。炎のドラゴンの像だ。数分おきに炎が吹き出す仕掛けで、炎の勢いはそれほどでもないけれど、授業で聞いた9世紀のスラブ民族の建国神話を思い出す。



ドラゴン像〔⑬付近〕



コシュエシコ像〔⑬〕



ヴァヴェル大聖堂〔⑬〕

2-4. コペルニクス、コシュエシコ、ショパン——中世・近世のポーランド史 ピヤスト朝からヤゲウォ朝へ

ピヤスト朝に最盛期をもたらしたカジミエシュ3世（カジミエシュ大王）は1370年に没する。大王は王位継承可能な男子に恵まれなかった。王位は大王の甥にあたるハンガリー王に継承され、そののち、ハンガリー王の娘ヤドヴィカがあとを継ぐ。

1385年、ヤドヴィカはリトアニア君主ヨガイラ（ヤゲウォ／ヴィワディスワフ2世）と結婚する。いわゆる「クレヴォの合同」であるが、これによってポーランド＝リトアニア連合王国（ヤゲウォ朝、1386～1572）が成立する。連合王国成立の背景となったのは、ドイツ騎士団領への対抗という政治的要因であった（渡辺2017:14）。

国教をカトリックとして広大な支配地域を有したヤゲウォ朝は、高校世界史の教科書でも取り上げられる。とはいえ、高校生にとっては、コペルニクス（1473～1543）、ショパン（1810～49）の名前をきっかけとするほうが、ポーランド史への親しみを覚えやすいかもしれない。授業では、これらの人物の伝記的事実に触れることで、ポーランドを理解する機会も設けている。

コペルニクス、ルネサンス文化

地動説の提唱でなじみ深いコペルニクスは、ポーランドのトルンで誕生した。トルンはハンザ同盟にも加入していたヴィスワ川沿いの港町であり、当時はヴェネツィア、ノヴゴロド、ニュルンベルクなどとの交易の中継地点であった。10歳で父が死去し、伯父ワッツェルローデのもとで育ったコペルニクスは、聖職者としての修業のため、クラクフ大学に入学する。その後、イタリアで10年間遊学するが、そこでルネサンス文化を学び、ギリシア語原典の文献に触れたことが、のちの『天球の回転について』（1543）に結実した。エルムランド管区の参事会員（教会の運営員）として教会の業務に関わりながら（コペルニクスは、ドイツ騎士団領とヤゲウォ朝の政治的仲裁にもあたった）、夜は聖堂の望星台にのぼって天体観測を行ったという（高橋 2020）。



コペルニクス像〔⑥〕

コペルニクスの名とともに、クラクフにおいてルネサンス文化を感じられる場所が、ヴァヴェル城およびヴァヴェル大聖堂である。ヴァヴェル城をルネサンス様式に改築した君主ジグムント1世は、王妃ボナ・スフォルツァの影響のもと文化・学問の発展に寄与した。ボナ・スフォルツァはイタリア・ミラノのスフォルツァ家出身であり、スフォルツァ家はルネサンスのパトロンであったことでも知られる。ハプスブルク家とフランスが対立したイタリア戦争のさなか、レオナルド・ダ・ヴィンチも一時スフォルツァ家に仕えていた⁽⁵⁾。ヴァヴェル城内ではボッティチェリ、ルーベンスなど、ルネサンス絵画の傑作も鑑賞できる。

ヴァヴェル大聖堂の金色のドームの真下は、ジグムント1世の霊廟となっている。このドームは、アルプス以北でもっとも美しいルネサンス建築の名作とされる。



ジグムント礼拝堂〔⑮〕



夕暮れ時の旧市街

ショパンとコシューシコの関係

「ポーランドの魂」と呼ばれる音楽家フレデリック・ショパン（1810～49）の生涯は、ヤゲウォ朝断絶後のポーランド分割の歴史が深く刻印されたものである。16世紀後半にジグムント2世の死によって断絶したヤゲウォ朝であるが、重要議題は王・元老院・下院が決定する、シュラフタ民主制とよばれる分権的な政治体制が特徴であった。下院を構成する中小貴族（シュラフタ）が力をにぎった体制は、ヤゲウォ朝断絶後の約200年間、シュラフタが王を選出する選挙王政として引き継がれた。

しかし18世紀後半、啓蒙専制君主が台頭するなかで、こうした分権的政治体制は政治的リスクへと転じていく。ポーランド南部のシロンスク地方は、現在でも最大の鉱業（炭田）地帯であるが、この地はかつてシュレジエンと呼ばれていた。オーストリアのマリア・テレジアとプロイセンのフリードリヒ2世が、オーストリア継承戦争ののち七年戦争（1756～63）においてシュレジエンをめぐる争ったことはよく知られる（なお、ピャスト朝の諸侯が統治したシロンスク公領群は14世紀にはボヘミア王国に服属している⁽⁶⁾）。

こうした情勢のなかで、ロシアのエカチェリーナ2世、オーストリア・ハプスブルクのヨーゼフ2世、プロイセンのフリードリヒ2世によって、ついにポーランドは三度にわたる分割の憂き目に遭い（1772、1793、1795）、結果として、ロシア革命の翌年1918年までの123年間にわたって地図から消滅することになる。

さて、この第2回ポーランド分割（1793）に抵抗して、ロシア、プロイセンと戦ったポーランドの英雄がコシューシコ（コシチウシュコ、1746～1817）である。そして、その際の戦闘に6ヵ月間加わったのが、フランス人で1787年にポーランドに移住したショパンの父、ニコラであった（崔2010:9）。



コシューシコ像〔15〕

ショパン作曲の楽曲には、マズルカ、ポロネーズなど、独特の3拍子のリズムを刻む、ポーランドの民謡・舞曲を取り入れたものが多くある。ショパンの生まれた年（1810）にはすでにポーランドは消滅状態であったが、1830年のフランス7月革命でブルボン朝が倒れ、立憲君主制への移行とともにウィーン体制が危機を迎えるにあたり、ショパンの関心は祖国ポーランドの独立軍の帰趨に向けられていた（ibid:58-60）。独立軍によるワルシャワ11月蜂起は、ロシア軍によって失敗に終わるが、ショパンの「革命のエチュード」がこの出来事をきっかけに作曲された伝説は有名である。授業ではショパンの楽曲を鑑賞しながら、これらの歴史についても触れている。

ポーランドにおけるロマン主義

ポーランドを理解するうえで、ショパンをロマン派の作曲家という観点からとらえておくことは重要である。関口時正は、ショパンあるいはポーランド文学者におけるロマン主義的契機の諸相を分析する論文において、次のように述べている。

……三国分割は、外来ロマン主義のテキストが刺激を与えるより早く、またより切実に、ポーランド語使用者に対して、歴史を再構築し、民族の起源と生涯を語り直すことを強めたのだったが、さらに進んで〈ポーランド人の歴史〉が〈使命〉〈殉教〉〈受難〉〈救済〉といった言葉によって読み直され、書き直されるようになる決定的な契機となったのが、十一月蜂起であった。(関口 2014:99)

スメタナ、ドヴォルザーク、チャイコフスキー、シベリウス、ムソルグスキーなど、ロマン派の作曲家がしばしば民族を主題としたとおり、ショパンは存在しないがゆえにかえって純粋に理念的でありうるような、ポーランド民族の連続性・一体性を主題とした。

このことは文学においても同様であり、クラクフ旧市街の中央市場広場には、ロマン派詩人アダム・ミツキエヴィチの像が建っている。この像は、中央市場広場の一番目立つところに配置され、自由行動のあとの気軽な集合場所となっている。とはいえ、この像が他ならぬこの場所に置かれていることは、ポーランドにとって必然的な歴史的理がある。



ミツキエヴィチ像〔10〕

3. アウシュヴィツ＝ビルケナウ強制収容所を訪れる

3-1. クラクフ旧市街の「負の遺産」(旅行記風に)——3日目の旅程

この日は快晴。そして、重い「負の歴史」を学ぶ日だ。オシフィエンチムに向かうグループと、シンドラー工場（現在は歴史博物館）を先に見るグループとで別行動となった。

シンドラー工場に向かう前に訪れたのが、英雄広場である。ポツポツと椅子のオブジェが置かれている。第二次大戦期、ユダヤ人地区に住んでいたユダヤ人たちは、ナチスの迫害を受け、ヴィスワ川対岸のポドグージェ地区のユダヤ人ゲットーに移動させられた。映画『シンドラーのリスト』でもこのシーンは印象深いものだった。このとき、ユダヤ人学校の生徒たちは、教室の椅子を運んできたというが、このオブジェには、そうした悲痛な歴史への思いが込められている。残存するゲットーウォールも見学した。ゲットーウォールが墓石の形であるのは、皮肉にしてはあまりに醜悪な、民族差別の歴史的証拠だと思う。

『シンドラーのリスト』のロケが行われたシンドラー工場は、現在博物館となっていて、クラクフの街の近現代史を振り返ることができる。第一次世界大戦が終わった1918年の11月11日、ポーランドは123年ぶりに独立を果たすことになるのだが、しかしクラクフは、ふたたび1939年から1945年までナチスに占領されてしまう。占領下のクラクフ、ゲットー内の暮らしぶりを学ぶことができた。シンドラーの執務室の巨大なガラスケースのなかには、映画でも出てきた鍋(ホーロー)が大量に並んであった。

午後は、オシフィエンチムへ。重い歴史を学ぶ日ではあるが、昼食はピエロギとケーキ。まずは沢山食べて体力をつける。



英雄広場



ゲットーウォール



オスカー・ファクトリー [カジメシュ地区]



戦前のクラクフの市民生活を学ぶ



シンドラーの執務室



ホーローのインスタレーション

3-2. ダークツーリズムの実践として

オスカー・ファクトリー

この講座の大きな目的のひとつが、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所を実際に訪問し、そこで展開された20世紀の人類史的悲劇の意味について考えることである。1939年のナチス・ドイツのポーランド侵攻ののち、ポーランド総督府が置かれたクラクフは、ドイツに対する農業・工業の労働力の提供地である総督領に位置づけられた。そこで第一の犠牲者となったのがユダヤ人であり、こうしたナチ・ドイツのユダヤ人政策は「ホロコースト」の悲劇へと展開していく。

こうしたことから、クラクフの街にも、近代の「負の遺産」の観点から重要な場所がいくつも見出される。その具体的な映像表現としては、スティーブン・スピルバーグ監督『シンドラーのリスト』（1993）が名高い。現地でのフィールドワークに向け、近現代史に関する限られた事前学習の機会として、この長大な作品は授業内でも鑑賞する。

映画のロケ地にもなっているオスカー・シンドラーのエナメル工場があった場所は、2010年よりクラクフ歴史ミュージアムとしてオープンしている。第二次世界大戦前のナチス占領以前のクラクフの歴史、大戦直前、そしてナチスの占領期、ソビエト軍による「解放」にいたるまでの第二次世界大戦全般の歴史が、ミュージアムの各部屋に展示されている（四方田・加藤 2018:65-78）。

映画『シンドラーのリスト』のなかでもゲットーが解体され、クラクフのユダヤ人たちがプワシュフ収容所に送られるシーンは、とりわけ衝撃的なものである。ほとんど全編がモノクロームの作品にあって、少女の深紅の服がカラーで浮かび上がるシーケンスを記憶にとどめる人は多いだろう。

ポーランドでも『シンドラーのリスト』をきっかけに、ドイツによるクラクフ占領の記憶が呼び起こされ、「ゲットーの英雄広場」には追悼



英雄広場の椅子のオブジェ

のオブジェとして金属製の椅子の作品が設置されることとなった。オスカー・ファクトリーも、この映画の影響のもと「負の遺産」継承を目的として博物館化された経緯がある。

ダークツーリズムの考え方

これらの場所を訪れるフィールドワークは、「ダークツーリズム」としての側面をもつ。観光学者・井出明によると、ダークツーリズムとは1990年代からイギリスで提唱され、2000年に学術書で初めて取り上げられるにいたった新しい概念である（井出2018:26）。悲劇の記憶を共有・承継し、教訓化することを目的として歴史的な場所を訪れるものであり、アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制・絶滅収容所への訪問は、まさにダークツーリズムの典型であるといえる。

ダークツーリズムの語は、日本では2013年に流行語大賞にも選ばれ、注目を浴びた。そのきっかけとなったのが、哲学者・東浩紀らによる『福島第一原発観光地化計画』の出版である（井出2021:29-32）。東は著書『哲学の誤配』のなかでこう述べている。

ぼくはチェルノブイリを自分で取材し、そのときの実感として、観光客的存在であることは非常に大事だと思いました。そのような構えがないと、目的にあった結論しか出てきません。（東2020:95）

社会をよくするためには、さまざまなひとたちが、観光客的な視線で、中途半端な知識でいろいろなことを無責任に話せる環境を整えることがとても重要だと思います。（東2020:95）

中途半端さ、無責任さといった言葉は、厳粛な追悼施設でもあるアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制・絶滅収容所の訪問に際して、あるいは不謹慎であると感じられるかもしれない。しかしダークツーリズムがツーリズム、すなわち「観光」の視点を打ち出していることには、この講座にとっても重要な含意がある。東の指摘するように、それは「現地で学ぶ」ことの明確な意図や目的が設定されること——たとえばいわゆる「平和学習」——が、その意図や目的の構図には収まらない、別の何かに気づくことを妨げうる危険に警鐘を鳴らすものであるからだ。



入口の門に「労働は自由にする」の標語が掲げられた第一収容所（アウシュヴィッツ）。門の下では、イスラエルの高校生が記念撮影をしている。

日本人ガイド・中谷剛さんの言葉

東は哲学者ジャック・デリダの「誤配」概念——コミュニケーションが郵便的な誤配によって別の可能性を生み出すこと——からこの問題を論じる。哲学的議論はさしあたり回避するにしても、アウシュヴィッツ博物館公式ガイドの中谷剛氏の次のインタビュー記事にも、通底する観点を見出すことができる。



国立アウシュヴィッツ・ミュージアム
公認ガイドの中谷剛さんから話を聞く

——「勉強になりました」とか、「頑張ってください」と言われると、「きょうのガイドは失敗だった」と感じるそうですね。

「アウシュヴィッツを3時間歩いて、その場で答えを出す必要はない、と思うからです。むしろ答えが出ずモヤモヤしながら、1年後、2年後に日常生活の中で『ああ、あの時間いたのはこういうことか』と腑に落ちるくらいがちょうどいい。常にモヤモヤしながら、柔軟に考えられることが、経験のないことが起こった時に、乗り越えていくことにつながるように思います」（『朝日新聞』2020年9月19日「「部外者」が伝える虐殺」）

この講座では、ポーランド渡航前に、いくつかの映画（『夜と霧』、『シンドラーのリスト』、場合によっては『SHOAH』）を鑑賞する以外の、近代史の授業は特別には実施していない。それは、現地で何を見るか、何を感じるかについての先入観をなるべく避けるためである。何かの「回答」を求めて現地を訪れることはむしろ危険でありうる。物事を柔軟に、素直に見ることで生じる「モヤモヤ」した感じを大切にしたい。

こうした態度を「倫理的要請」の側面から捉え直すこともできる。そもそもアウシュヴィッツにおける歴史的惨禍は、何を見るか、何を感じるべきかについて特定の方向づけが可能であるような類のものではない。被害者についても、加害者についても、誰も安易に彼らを「代弁」することはできない。これは〈アウシュヴィッツ〉の表象不可能性の問題として、しばしば哲学的・倫理的議論の対象となってきたものである。



霧の中の第二収容所（ビルケナウ）

さらに突き詰めて、真摯な態度でなければアウシュヴィッツについて語る資格をもたないのかという、いささか挑発的な問いも定式化しうる。第二次世界大戦から約80年が経過す

るなかで、アウシュヴィッツも「歴史の忘却」の対象の例外ではない⁽⁷⁾。生真面目な態度でなければそれについて語るべきではないという厳格さは、かえってアウシュヴィッツの忘却への流れを助長するかもしれない。中途半端な知識で、無責任に、しかし知らなければならぬ歴史の刻まれた地を、観光客として訪れること——ダークツーリズムの考え方から学ぶべきポイントは多い。

3-3. 「アウシュヴィッツ・ビルケナウ——ナチス・ドイツの強制・絶滅収容所 (1940-1945)」への訪問 (旅行記風に) ——3日目の旅程

ポーランド語でオシフィエンチムの地名は、ドイツ語でアウシュヴィッツと呼ばれた。第1強制収容所(アウシュヴィッツ強制収容所)の門には、“ARBEIT MACHT FREI(労働は自由にする)”の文字が見える。重厚な建物が立ち並ぶその雰囲気は一見大学のキャンパスのようだが、内部で行われていた行為は目を背けたくなる凄絶なものだ。収容されたユダヤ人のカバン、靴、ニベアクリーム空き缶、大量の髪の毛など、展示物ひとつひとつの重みは筆舌に尽くせない。写真のなかで収容者が浮かべる表情にも胸に迫るものがある。



チクロン B の空き缶



遺品 (靴)



遺品 (眼鏡)



遺品 (靴)

日本語ガイドの中谷さんが教えてくれたように、ヨーロッパ中から多くの学生達がこの「負の歴史」の教訓を学びにやって来ている。白いスーパーカーを来た同年代の学生たちはイスラエルからの訪問者だ。それでもあたりを見回せば、私たち以外、アジアや日本からやってくる学生たちはまだ数少ない。私たちには、この体験を周囲の人達に伝えていく責務があるだろう。ガス室の天

井を見上げると、チクロンBが投入された穴が四角くぽっかりと開いて、そこから青い空がのぞいている。

第二収容所のビルケナウ強制収容所では、『アンネの日記』で有名なアンネ・フランクが収容されていた場所も訪れた。モンテッソーリ教育で自分の考えをしっかりと持つことを学んだアンネのエピソードを語った公式ガイドの中谷剛さんは、つづけて自由で校則がない中附について「校則や制服がなく、ルールに縛られず、自分たちで考え行動できる環境で学んでいる皆さんのような姿勢がとても大切だ」とおっしゃった。



クレマトリウム（ガス室）



クレマトリウムの内部1



クレマトリウムの内部2



チクロンBの投入口

3-4. なぜホロコーストは起きたのか？

ナチズムをめぐる素朴な疑問

ヒトラーが1939年1月30日の国会演説で、人種主義的反ユダヤ主義のイデオロギーも露わに次のような陰鬱な予言をしたことは、あまりにも有名である。

もしヨーロッパ内外で国際的に活動するユダヤ人資本家が諸国を再び戦争に突入させることに成功しても、その結果起こるのは世界のボルシェヴィキ化でもユダヤ人の勝利でもない。ヨーロッパユダヤ人の絶滅だ。（ベッセル 2015:22）

ナチ党（国民社会主義ドイツ労働者党）は、ヴェルサイユ条約の破棄、不労所得の廃止、反ユダヤ主義と民族共同体の理念の実現などの公約を掲げ、突撃隊（SA）などの暴力的装

置を活用しつつ党勢を拡大した。1933年1月30日党首アドルフ・ヒトラーは、ワイマール共和国の当時の大統領ヒンデンブルクによって首相に任命される。3月24日には内閣に無制限の立法権を付与する全権委任法が成立する。

ヒトラーによる冒頭の予言は、1939年9月1日のドイツによるポーランド侵攻とともに自己成就へと向かう。ナチ・ドイツは、東欧に植民地を獲得し、スラブ人を隷属させ、経済封鎖に耐えうる自給自足可能な巨大経済地域の確立を目的として、人種主義実現のための戦争を開始した（ベッセル 2015:123）。

さて、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所を訪れ、帰国した生徒にとって、まず素朴に浮かぶ問いが「なぜナチ・ドイツはこのような戦争を引き起こし、ホロコーストのような現実を招いてしまったのか？」であるだろう。

しかしながらこの重要な問いは、同時にあまりに巨大なものでもあり、到底ひとつの授業で取り組みうるようなものではない。帰国後の2学期・3学期の授業では、各生徒の個別の問題意識を自由発表で深めていく時間にシフトすることもある。この問題を正面からあつかうことは難しい。ただし、生徒が自身の関心に接近する助けとなるように、以下の二つのテーマについては概要を共有している。

なぜナチ党は出現したのか？——ヴェルサイユ条約後のドイツ共和国

教科書的な理解では、ナチ・ドイツの出現は第一次世界大戦後の政治情勢と関連づけて語られることが多い。第一次世界大戦で敗戦国となったドイツ共和国（ワイマール共和国）は、ヴェルサイユ条約において過大な賠償金支払いを迫られた。1919年8月に成立したワイマール憲法は、男女普通選挙や労働者の団結権、生存権を規定したもっとも民主的な憲法であったが、多額の賠償金によってドイツは苦しめられることとなった。

賠償金支払いの遅延を理由に、1923年、フランス・ベルギーが工業地帯ルールを占領すると、ドイツはストライキによる消極的抵抗を行い、インフレーションは空前の規模となった。シュトレゼマン内閣はルールでの抵抗を中止させ、土地財産を担保とする新紙幣 Rentenmark を発行し、ひとまずインフレの収束は図られる。その後、賠償請求に関するドーズ案の受け入れ、ロカルノ条約締結（1925）と国際連盟への加盟（1926）などの方策により国内はいったん立て直しに向かうと思われたが、1929年に始まる世界恐慌は、ふたたび失業者の増大など経済の混乱をもたらし、それは政治危機を招来した（ベンジャミン・カーター・ヘット 2018=2020:104-105）。失業手当削減をめぐる問題で連立内閣が崩壊すると、軍部と保守派は少数派内閣を樹立し、ワイマール憲法 48 条 2 項にもとづく大統領緊急令が濫発され、議会は空洞化していく（長谷部・石田 2017）。

こうしてワイマール体制が自壊するなか、ヴェルサイユ条約の破棄、不労所得の廃止、反

ユダヤ主義に基づく民族共同体の称揚を主張とするナチスは、プロパガンダの手法や突撃隊（SA）による暴力的措置を用いて、政権の座へと近づいていく（その象徴的事件が1938年11月の「水晶の夜」である。ゲッペルス の指示に基づき SA が実行し、全国的なボグロムとなった）。共産党支持を嫌う保守派・産業界からの接近、既成政党に絶望した農民層・中間層からの支持を得たナチスは、1933年にヒトラー内閣を樹立させるにいたる。

授業では、近現代史があつかわれる高3世界史との接続も見すえながら、上記の史実にごく簡単に触れている。

なぜレイシズム（人種主義、優生思想）の考え方が生まれたのか？

アウシュヴィッツ・ビルケナウを訪れて、ホロコーストの根底にあるレイシズムの起源に関心をもつ生徒もいる。歴史学者・石田勇治によれば、レイシズムは次のように定義される。

レイシズムとは、人間を生物学的特徴や遺伝的特性によっていくつもの種（race ドイツ語では Rasse）に区分し、それら種の間に生来的な優劣の差があるとする考え方で、そうした偏見に基づく観念、言説、行動、政策などを意味する。（石田 2015:257）

石田の整理にしたがえば、19世紀後半に拡大したレイシズム、および優生思想が、反ユダヤ主義と結びつくことによって、人種的反ユダヤ主義が生まれることになった。

レイシズムの成立は、第一に、産業革命が勃興した19世紀ヨーロッパの社会情勢と大きくかかわっている。急激な産業化、世俗化、都市化、人口の爆発的増加、大衆ナショナリズムの台頭は旧来の伝統的価値観を掘り崩し、人々の不安は増大した。この点に注目したナチズム研究の古典のひとつが、エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』である。

第二に、19世紀は欧米列強の海外進出が進んだ帝国主義の時代であり、そのことと相俟ってゴビノー『人種不平等論』（1848）らの進化論・人類遺伝学が興隆したことも大きな影響をもった。ドイツの音楽家リヒャルト・ヴァーグナーがその楽劇においてアーリア＝ゲルマン神話を使用したことも、当時の状況を示すものといえるだろう。

こうしたレイシズムが、「遺伝的劣化を防止し、優れた遺伝形質を保護しようとする優生学」の形成を促すこととなる（石田 2015:259）。ダーウィン『種の起源』（1859）の進化論、メンデルの法則などの遺伝学の成果の「誤読」を通じて、イギリスではフランシス・ゴルトンが、ドイツではアルフレート・プレッツが優生学（人種衛生学）を提唱した。ドイツで優生学が広まった背景には、第一次世界大戦によって約200万人の男子を失い、女性の社会進出とともに出生率低下に見舞われたドイツが、「いかにして優れた人間をつくるか」という国家的課題を抱えていたこともあった（石田 2015:261）。

このようなレイシズム・優生思想は、最終的に反ユダヤ主義へと結びついていく。

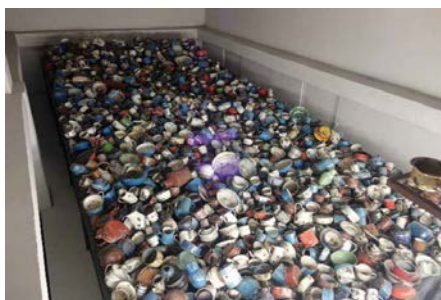
そもそも宗教的反ユダヤ主義は、キリスト教世界で古くから見られたものである（16世紀末、シェイクスピア『ヴェニスの商人』のシャイロックは金貸しのユダヤ人である）。しかし18世紀後半、フランス革命とともに理性を重視する啓蒙思想が広がると、ユダヤ人の開放および法的権利の同権化の流れが生まれた。ビスマルクがドイツ統一（1871）を果たすと、ドイツでもユダヤ人の法的平等が実現され、デパートや大量生産工場の経営などで経済的に成功するユダヤ人も出現するようになる。そして第一次世界大戦後の不況が深刻化すると、ユダヤ人への反感が高まり、「反セム主義」の人種思想とこの差別感情が結びつく。これが「人種主義的反ユダヤ主義」の成立を促した（フレドリクソン 2002=2009:76-79）。

なぜユダヤ人が迫害されることになったのか。——アンネ・フランクの『アンネの日記』をきっかけとして講座を履修する生徒も多く、この謂れなきユダヤ人差別の起源について関心をもつ生徒は多い。ただし以上のように、この問題について高い解像度で理解することは簡単ではない。年度によっても異なるが、授業では理解の助けのために『BS世界のドキュメンタリー ヒトラーの子どもたち』（フランス、2017）を視聴したうえで、上記の史実を紹介している。このドキュメンタリー作品は、ナチスの「レーベンスボルン（生命の泉）」計画をあつかったものであり、レイシズムのおぞましさがよく理解できる。

3 - 5. 生徒の感想文（2018年10月研究旅行）からの抜粋

「現状でまず衝撃を受けたのは、収容所内ののどかさです。現在は平和だからという理由もあると思いますが、日が差して木漏れ日が落ちている景色は、そこが昔歴史的な残虐行為が行われていた場所とは思えないほどでした。

館内に入ってまず僕の目に止まったのは、連行されたユダヤ人達が持ってきた食器の山です。「子どもを安心させる為に食器等の日用品を持って行って、生活が続くと思わせようとした」という中谷さんの説明を聞いて切ない気持ちになりました。また、ボディクリームの中にあったニベアの缶は、このポーランド旅行中に同じものを買った僕に強い衝撃を与えました。」



遺品（食器やコップ）



遺品に見入る

「博物館で見ることの出来る展示はどれも生々しく恐ろしいものばかりだった。処分し切れなかった大量の頭髮、連れて来られた人たちの靴やかばん、本人の元に届くことのなかったスーツケース。しかし、それらが展示されていることで分かる起こった事の重さ、理不尽に命を奪われた命の異常とも言える多さを嫌でも知ることになった。」



第一収容所内を歩く



有刺鉄線

「アウシュヴィッツ第一強制収容所では内部のガス室やユダヤ人から没収した所持物などの展示をガイドさんと共に回ってみるのが中心でした。しかし、外観だけを見てみると、同じ造りの建物が奥まで続いている光景やあらゆる所に張り巡らされている有刺鉄線には違和感を覚えるものの、緑豊かで空も澄んでおり、日本と比べるととても穏やかな印象を受けました。……本来のアウシュヴィッツはこんなにも良い場所なのに、ホロコーストの舞台となってしまったことに対して疑問を抱かずにはいられませんでした。」

第二収容所では白いパーカーを着た多くのユダヤ人を見かけました。私たちは事前に、自撮りや集合写真の撮影は控えるようにと現地ガイドの人に伝えられていました。しかし大きな傷を抱えているはずのユダヤ人が明るい笑顔で写真を撮り合っていることに大きな違和感を覚えました。日本人ガイドの中谷さんに「あれは本心を隠すためにわざと明るく振る舞っている」という風に教えられたときには衝撃を受けました。」



第二収容所（ビルケナウ）



「死の門」の二階部分



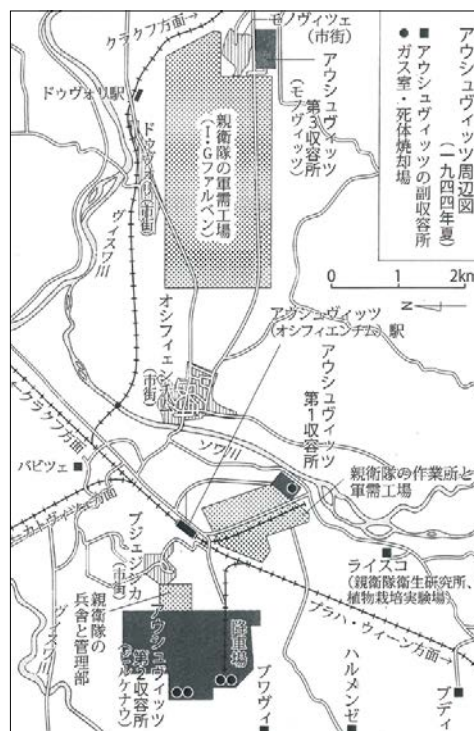
「死の門」から眺めるビルケナウ



アンネ・フランクの逸話を聞く

「中谷さんの言葉で私によく響いた言葉がいくつかある。ビルケナウに入る、通称「死の門」を通った時だ。何の疑いも抱かずに線路の上を歩いていたが、彼に「この線路がなくなると遺族の追悼の場が失われてしまう。上を歩かないでください」と言われた。シリアスな場所なので立ち振る舞いには気を付けているつもりだったが、自分の愚かさを突き付けられた。「想像すること」がいかに難しいか、かつてナチスはこれができなかったためにホロコーストを起こしてしまったのではないか、それは人間誰も可能性はあることで、今の私の心理と何ら変わらないではないかと空恐ろしくなった。」

「第二収容所（ビルケナウ）は、まわりが野原で見通しがよく、第一収容所同様、有刺鉄線がまわりに張り巡らされていました。……建物は木造で作っていたため当時の人が薪に利用していたのでほとんどありませんでした。しかし煙突だけは残っていました。レンガ造りであったものは残っていて、寝床はとても狭く自分が横に真っすぐ寝ることはできない感じで、縦の幅も狭くこれが三段あり、この中で寝るのは厳しいなと思いました。」



収容所間の位置関係（武井 2021：88）



引き込み線上の貨物車両



三段のベッド（ビルケナウ）



収容所のトイレ（ビルケナウ）

「第一収容所で一番印象に残っているのは、中谷さんの説明にあった、ユダヤ人出ていけ！というヘイトスピーチが過激になり、害虫出ていけ！というようになり、実際にチクロンBという殺虫剤の一種で人間を殺すようになったという、ホロコーストが起こるまでの流れだ。当時、先進国だったドイツ内で起こったことなのだから、もう二度とこのような歴史が繰り返されないと言い切れないと怖くなった。そのためにも現代に生きる私たちがこの歴史を真剣に学び、一人ひとりが傍観者にならないように気を付けなければならない。」

3-6. アウシュヴィッツ訪問の「教訓」

映画『否定と肯定』と歴史修正主義

海外フィールドワーク後の授業内容は、自分自身の関心にもとづく自由研究発表（ポスター作成、児童文学先品の発表を含む）がメインである。したがって授業では、映像作品などを鑑賞しながら、個別の探究に役立つような補足的な講義を行っている⁽⁸⁾。映像作品の選定は、年度ごとにヴァリエーションが存在するが、かならず視聴する作品のひとつに、ミック・ジャクソン監督『否定と肯定』（2016）がある。この作品は、ホロコースト否定論、すなわち歴史修正主義（revisionism）の問題をあつかったものである。

『否定と肯定』は、ユダヤ人の女性歴史学者リップシュタットが、「ナチスによる大量虐殺はなかった」と主張する歴史家アーヴィングを著書において批判し、そのことがアーヴィングによって名誉棄損として訴えられ、イギリスの法廷に持ち込まれた実話にもとづく。

アーヴィングのような「ホロコースト否定論」の特徴は、ピエール・ヴィダル＝ナケによると、次の6つのポイントに集約される（ナケ 1995:39-41）。1）ジェノサイドやガス室の存在の否定、2）ユダヤ人の東欧方面の「追放」でしかなかった、3）犠牲者数の矮小化、4）戦争責任の否認（戦争は一方が悪いだけではない）、5）敵を構築して責任転嫁、6）ジェノサイドはシオニズムのプロパガンダによるでっちあげ。——これらのポイントは、映画『否定と肯定』のなかでも言及されている（リップシュタット 2005=2017）。

結局、敗訴したアーヴィングは200万ポンドの訴訟費用の支払い命令を受けて破産する。

このアーヴィング裁判について武井彩佳は、「意図的に史料を読み替え、自らの政治信条に都合のよい歴史を書く人間を論破し、社会から悪しき言論を除去するには、膨大な時間、労力、資金が必要であるという事実」を明らかにしたものと総括する（武井 2021:174-175）。

加えて、武井によれば、否定論者によって立証責任を負わされた側が「劣勢に見える」という事態が深刻である。「人はそれまで事実と信じていたことが「事実でないかもしれない」可能性を示唆されると動揺する」からである（ibid:69）。

……歴史修正主義者は、人々に認識の「揺らぎ」を呼び覚ますことを意図している。実際には明らかに白に近いものと、明らかに黒に近いものがあるにもかかわらず、その差が曖昧にされ、学術的な知見に基づいて構築された歴史解釈が骨抜きにされてしまうのだ。（ibid:70）

実際に現地を訪れた人間だからこそ、他人事ではない問題意識をもちうるテーマとして、3 学期の授業内ではこの問題について考える機会を設けている。さらに日本においては、次節に述べるような事情があることにも留意したい。

ヘイトスピーチと表現の自由

『否定と肯定』を取り上げる理由には、歴史修正主義が日本においても歪んだ保守言説として一定の影響をもっていることがある。その端緒が 1995 年の「マルコポーロ事件」である。これは、阪神大震災と同日 1 月 17 日に発売された雑誌『マルコポーロ』（文藝春秋社）で「戦後世界史最大のタブー ナチガス室はなかった」と題する論文が掲載され、ユダヤ人団体サーモン・ウィーゼンタール・センターの抗議を経て、雑誌が廃刊に追い込まれた事件である。映画鑑賞後の授業では、次の二つの論点を紹介している。

第一に、この問題はヘイトスピーチ規制のあり方をめぐる法学的な議論とも接続して、今日的な重要性をもっている。日本においては「ヘイトスピーチ解消法」が 2016 年に施行されている。しかし日本国憲法第 21 条「表現の自由」の憲法解釈をめぐって、表現規制のあり方には議論が分かれる。アメリカ・イギリスは表現の自由を重視する傾向にある一方、大陸系のヨーロッパ諸国では法規制に踏み込むケースが多い（武井 2021:184-185）。そもそも歴史修正主義が「ヘイトスピーチ」なのか、法的規制のみが対抗策であるのかどうかも含めて、法学者を巻き込んだアクチュアルな議論が続けられている⁽⁹⁾。

第二に、歴史修正主義については、政治運動としての側面、保守（愛国）ビジネスとしての側面、需要（受け手）側の側面などに着目した、社会学的分析も重要である（倉橋 2018）。メディア論的にはエコーチェンバー現象といった、SNS 時代に特有の問題領域を指

摘することもできる。歴史修正主義的言説が日本でも一定の影響をもつ以上、これらテーマは生徒にとっても考える価値のあるものといえるだろう。

「歴史から教訓を得る」こと

高2「倫理」でもあつかわれるフランクフルト学派は、ナチズム台頭のもとアメリカに逃れてファシズム研究をおこなった知識人集団である。なかでも社会学者テオドール・アドルノの箴言「アウシュヴィッツのあとで詩を書くことは野蛮である」（『文化批判と社会』、『ブリズメン』所収）はあまりにも有名である。

ただし、細見和之が注意をうながすように、これは「詩を書くな」という要請ではない。たとえばアドルノは「死のフーガ」などで名高いパウル・ツェランの詩を高く評価していた（細見 2014:145-150）。美や理想を追求する天真爛漫な詩作はもはやありえず、それらに対して批判的でありうるような歴史的思考が必要だ、というのがアドルノの意図だろう。

アドルノはマックス・ホルクハイマーとの著作『啓蒙の弁証法』で、1) 神話はすでにして啓蒙である、2) 啓蒙は神話に退化する、という二つのテーゼを打ち出している。その上で、ホメロス『オデュッセイア』における、オデュッセウスとセイレーンの神話が象徴するように、自然を支配する道具としての理性（道具的理性）が、かえって人間の内なる自然を抑圧する人間疎外を生み出す、弁証法的機制を明らかにした。「何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代わりに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」というアドルノ・ホルクハイマーの問いは、ヨーロッパへの歴史的哲学的考察へと誘うものである（アドルノ／ホルクハイマー 1944=2007:7）。

これらの項目は、「倫理」との接点もありうることから、授業のなかでも触れることとしている。とはいえ、アウシュヴィッツという歴史から何を学ぶべきかについては、容易ならざる問題をはらんでいる。アドルノらの指摘する歴史哲学的問い自体がそもそも難解である上に、前述のとおり、アウシュヴィッツの表象不可能性の問題にも直面するからである。

授業担当者として直面すること

たとえば、アウシュヴィッツからの生還者である文学者ブリーモ・レーヴィは、「グレイ・ゾーン（灰色の領域）」というエッセイのなかで、収容所の歴史は「犠牲者と迫害者という二つのブロックに還元されるものではなかった」ことを指摘している（レーヴィ 1986=2019:44）。レーヴィはゾンダーコマンドの存在をふまえて、ホロコーストの加担者は犯罪者にはちがいないが、加害者のなかにはいつのまにか残虐な犯罪に手を染めることになった、犠牲者側の人間もいたことに注意を促す⁽¹⁰⁾。レーヴィによれば、ホロコーストの大量殺戮のシステムは「私たちの本質的なもろさ」を抉り出すものであり、物事をはっきり

善悪に二分して理解できない、多面的で複雑な経験として存在していた。それはある意味で、われわれの理解を拒むものとしてある⁽¹¹⁾。すなわち、アウシュヴィッツの表象不可能性の問題である。

しかし、アウシュヴィッツの歴史を「語りえないもの」として敬して遠ざけ、あたかも神話の領域に閉じ込めてしまう振る舞いにも別の問題が生じるだろう。というのも、「歴史の風化」は現在、着実に進行しているからである。

NPO 団体「対独賠償請求ユダヤ人会議」（本部ニューヨーク）による近年の調査によれば、オランダ国内の 40 歳未満の 23% が、ホロコーストを「作り話」と考えるか、「ユダヤ人の犠牲者数が大幅に誇張されている」と回答したという（全回答者中の 12%）。またアムステルダムを隠れ家としたアンネ・フランクが強制収容所で死亡したことを知らなかった者は 40 歳未満で 32% にのぼった（全回答者では 27%、日経新聞 2023 年 1 月 30 日）。

しかし他方で、自らを省みて「アウシュヴィッツ」の語によって、わたしたちは何を知っているのか、という問題も浮上するだろう。そもそもホロコーストの実態は「アウシュヴィッツ」に集約されるものではない。「アウシュヴィッツ」と記号的に名指される施設の正式名称は「アウシュヴィッツ・ビルケナウ——ナチス・ドイツの強制・絶滅収容所（1940-1945）」である。この名称が示すとおり、アウシュヴィッツは懲罰目的で強制労働させる「強制収容所」としての性格と、ユダヤ人の殺害のみを目的とした「絶滅収容所」としての性格との「複合的性格」をもっていた⁽¹²⁾。



“Arbeit macht frei” は強制収容所で用いられたスローガンだった

これに対して、1942～43 年にポーランド東部に設立されたベウジェツ、ソビボル、トレ布林カの 3 つの収容所は、純粋な「絶滅収容所」であった。それらは冷酷な絶滅収容所であるがゆえに生存者がアウシュヴィッツより極端に希少であり、それゆえに長らく歴史的に忘却されていた。したがって、最大の犠牲者数を数えた「アウシュヴィッツ」ではあるとはいっても、その固有名の神話化は安易であるだろう。それは「歴史の忘却」の知的態度と、表裏一体のものであるからだ（田野 2018、田野 2020:128-129）。

こうした次元の異なるさまざまな問題をを超えてなお、歴史は伝承されなければならない。ダークツーリズムの意義が浮上するのも、この文脈をふまえてのことだ。歴史を伝えるとはどのようなことであるべきか、授業担当者として考えさせられる点は多い。

4. クラクフ郊外の遺産を訪れる

4-1. ふたたび中世ポーランドに触れる（旅行記風に）——4 日目の旅程

4 日目午前は、14 世紀のポーランド王国ピャスト朝のカジェミシュ 3 世（大王）によって開発され、1978 年にユネスコの世界遺産として初めて認定されたヴィエリチカ岩塩坑を見学する。

地下 325 メートルにおよぶ岩塩坑であり、簡易エレベータで下降すると、まるでテーマパークの乗り物に乗ったような高揚感がある。観光ルートの最深部にある聖キング聖堂は、彫刻・シャンデリア・壁・天井など、礼拝堂のすべてが岩塩の結晶で出来上がった壮麗な空間で、迫力ある美しさはほかでは味わえない。

岩塩の切り出しや、馬が働いていた様子など、当時の労働現場が伝わる展示にもなっている。授業でならったキング姫の婚約指輪の伝説も、彫刻で見事に表現されていた。見学後には徒歩で昼食会場へ。魚のフライが美味しい。デザートはチョコレートのアイス。



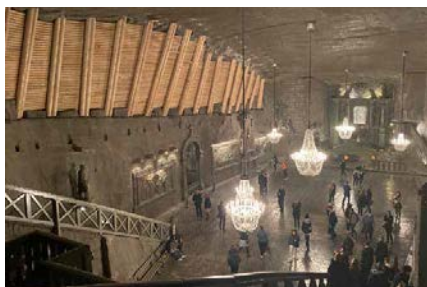
ヴィエリチカ岩塩坑



キング姫の伝説の彫刻像



坑内で働く馬の様子



聖キング大聖堂



岩塩で出来たシャンデリア（聖キング大聖堂）

昼食後は、バスでオグロジェニェツ城に向かう。14 世紀に他国からの防備のために築城された古城は、風景が抜群で、内部の作りもかっこいい。この城は、鷲の巣古城群とよばれる城のひとつである。寒さを忘れて、探検気分を味わった。夜の自由散策ではクラクフ旧市街に戻り、お土産を買い込んで、中央広場のレストランでカツレツを食べる。イチゴのシャーベットも美味しかった。



オグロジェニエツ城塞 1



オグロジェニエツ城塞 2

4-2. クラクフ郊外の歴史散策

オグロジェニエツ城

オグロジェニエツ城塞は、クラクフとチェンストホヴァの間に位置し、石灰岩層の小さな丘をそのまま活用して築かれた中世の古城である（カウフマン 2001=2012:251-253）。建設者はヴロデク・スリムチクであり、彼の子孫が1470年まで居住した。その後、クラクフ出身の別の一族に売却され、16世紀になってからルネサンス様式に再建される。スウェーデン人たちの侵略によって17世紀と18世紀初頭の二度にわたって破壊されたこともあって、現在はむき出しの構造をさらした廃墟となっている。しかし、その内部は冒険心が掻き立てられる独特の魅力に満ちている。探検していると、時間が経つのを忘れるほどである（次頁の城塞図は、カウフマン 2001=2012:253）。



中世の拷問道具を試してみる



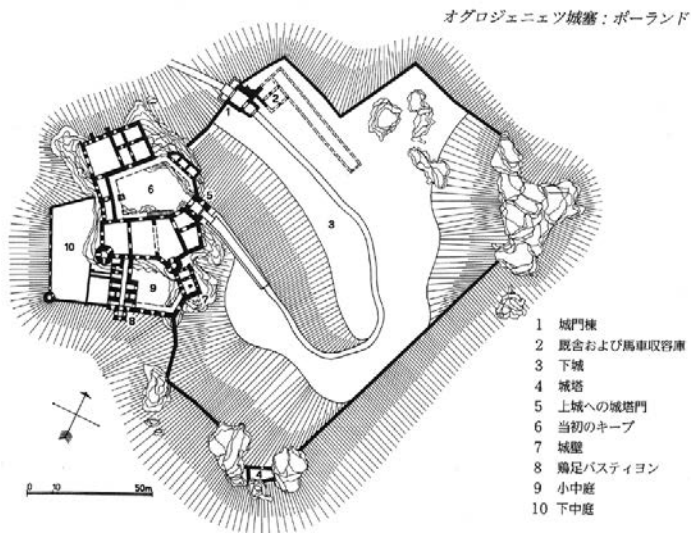
城塞内部 1



城塞内部 2



城塞内部 3



眼下に広がる郊外の風景

ヴィエリチカ岩塩坑

ヴィエリチカ岩塩坑は、クラクフ旧市街地からは南東 10 キロほどの場所にある。1978 年、ユネスコの世界遺産の最初の登録がなされた。中世ヨーロッパでは塩は料理の味付け、食材の保存のために用いられ、とくに内陸部においてきわめて貴重なものであった。そのため、ピヤスト朝・ヤゲウォ朝の時代には、塩で得られる収益は国家歳入の三分の一を占めたという（四方田・加藤 2018:39-50）。岩塩坑の開発を進めたカジミェシュ大王は、坑内で岩塩の彫像にもなっている。

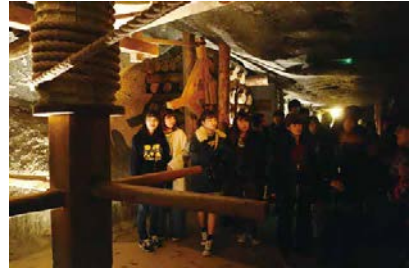
スチュワート朝チャールズ 2 世の勅許により設立されたロンドン王立協会が 1670 年、ドイツ人紳士から入手した次の報告は、岩塩坑の様子をよく伝えるものである。



カジミェシュ大王

三、四〇人もの人が一本の「大きな綱」に結びつけられた吊り索にそれぞれぶら下がり、馬で駆動される縦軸型巻上機によって、鉛直に一八〇メートル下まで下ろされたり挙げられたりされる。下りた者は、ランプをもち、「奇妙な通路や迷路を通して」さらに 100 尋〔約一八〇メートル〕下りて地下三六〇メートルのところにつく。色によって白から黒まで三種類に区別される塩が、丸っこい塊としてとり出され、クラクフに送られて、つき砕いて利用される。（マルソーフ 1978=1989:57）

現在、ヴィエリチカのツーリストルートは、最深部が135メートルで、2時間ほどのツアー内容になっている。ルートの全長は2キロで、アリの巣のような構造である。歴史・神話や宗教上にかかわる岩塩彫刻のモチーフを見学しながら、大聖堂である聖キングのチャペルまで進んでいく（四方田・加藤2018:39-50）。途中には、上記引用のような採掘の様子が追体験できる仕掛けもある。



採掘の体験コーナー

ピウスツキ兄弟

ヴィエリチカ岩塩坑の最後に、ヨゼフ・ピウスツキの像がある。18世紀末のポーランド分割以来、占領されていたロシアからポーランドが123年ぶりに復活を遂げるのは1918年のことだが、ヨゼフは、ポーランド独立運動を指導した革命家であった。

ヨゼフは、母親マリアから当時ロシア政府によって禁止されていたポーランド語の読み書きと自国の歴史を学び、皇帝アレクサンドル3世の暗殺計画で兄とともに連座し、懲役刑となる。解放後は、日露戦争（1904）に勝利した日本にやってきて連携を模索するが、空しく失敗に終わる。第一次世界大戦後、ポーランドの国家元首（初代首相）となった。



ヨゼフ・ピウスツキ

このヨゼフ・ピウスツキの人生からは、帝国主義の大国ロシアに抑圧されたポーランドと、日露戦争でロシアを破った日本の、近代史における結びつきを見出すことができる。さらに興味深いのは、ヨゼフの兄ブロニスワフ・ピウスツキと、日本との関わりである。

ブロニスワフも、アレクサンドル・ウリヤノフ（レーニンの兄）を中心とする学生革命グループの一員として、上記の皇帝暗殺計画にかかわったことが露見し、樺太で流刑囚となる。樺太アイヌや原住民のギリヤークと交流するなかで人類学的関心を深め、アイヌ女性チュフサンマと結婚して一男一女まで設けた。人類学者としてアイヌの地で写真機と蠟管蓄音機を携えて資料収集にあたったほか、大隈重信や片山潜との交流、二葉亭四迷との間で日本ポーランド教会の構想を進めるなどの活動でも知られている（伊福部2020）。

ブロニスワフ・ピウスツキの人類学者としての功績は大きい。1983年、ポーランドのザコパネに残されていた64本の蠟管が発見された。これはブロニスワフが蠟管でアイヌの言葉や歌を記録したものである。この貴重な資料はアダム・ミツキエヴィチ大学から北海道大学に貸与され、蠟管再生および分析がおこなわれた（伊福部2011）。

ブロニスワフの生涯は、直木賞受賞作である川越宗一『熱源』でも活写されている（川越 2019 → 2022）。人類学という「帝国主義」と深い機縁をもつ学問を、ロシアから抑圧されたポーランドで育ち、樺太という辺境に追いやられた「帝国主義の犠牲者」であるブロニスワフが実践すること——そのこと自体、アイロニカルな悲劇性に満ちている。この内容は、授業では軽く触れる程度であるが、『熱源』は国語科において 2022 年度の本校課題図書にも指定された。



ガイドさんからブロニスワフ・ピウスツキの逸話が紹介される

5. 現代社会としてのポーランド

5 - 1. 最終日のクラクフ街歩き（旅行記風に）——5 日目の旅程

最終日、クラクフの街ともお別れの日がやってきた。朝 8 時 20 分にホテルロビーに集合し、2 日目にも訪れたクラクフ旧市街に徒歩で向かう。あらかじめ前日から荷物のパッキングをある程度済ませておくように指示されている。

本音を言えば、もう少し、いや出来ればずっと、この街にいたい気もする。幸い短い時間だが、まだ中央広場でお土産を買うくらいのことは出来そうだ。「テントウ虫」のマークのついたスーパーマーケットが朝から開いていたので、チョコレートのお土産を購入する。クレジットカードを差し出すが、自分で読み取り機に差し込む必要があるのが分からず、店員さんをいらだたせてしまう。よくよく考えると、事前学習をしてきたとはいえ、この街については、まだまだ知らないことばかりだ。



織物会館内で買い物。スリに注意



中央市場広場のオープンマーケットにて

たとえば、中央広場の聖マリア教会前の銅像は、誰の銅像なのだろう。アダム・ミツキエヴィチ？ インターネットで検索してみても、ポーランドの国民的詩人であり、ポーランド独立に関わった人物のようだとはいじめて知る。

それでも、この街が積みかさねてきた歴史の奥行きを感じとることはできたと思う。それだけでも、よしとしなければならないのかもしれない。帰国したら事後学習をがんばろう。でも、その前にハードな帰国フライトを乗り切らねば……。帰りの飛行機は、行きよりも2時間ほど少ない移動時間で羽田空港に到着。日本時間の12時に解散の予定。



露店で食べ歩き



中央市場広場のスターバックス

5 - 2. 現代ポーランド社会をめぐって

ポーランドの現代政治——右派政権「法と正義」

現地フィールドワーク前、ワレサや「連帯」について事前学習することは冒頭に述べたが、それと同時にポーランドの現代政治についても、授業内で触れることにしている。とりわけポーランドは政党「法と正義 PiS」が2015年に政権についており、注目されている。

授業では、次のような新聞記事を生徒に提示している。「ポーランド、嘆く性的少数者 政権から敵視、大統領選の争点にも」(『朝日新聞』2020年7月10日)、「ポーランド大統領選挙、大接戦だったの?」(『朝日新聞』2020年7月21日)、「ポーランド、デモ拡大 中絶禁止判決へ抗議10万人」(『朝日新聞』2020年11月2日)。

これらの記事内容から分かるように、政権政党の「法と正義」は、カトリックの伝統を強調する愛国主義や、自国第一主義の反EU的な主張を特徴とする右派政権である。ポーランドにおける篤いカトリック信仰、イギリスがEUから離脱したブレグジット、そして何よりも、ナチ・ドイツによる収容所の歴史があったポーランドで排外主義的言説が流通することの意味など、授業内であつかう知識と関連させて、生徒もさまざまに考えを深めることのできる論点である。

東欧革命によって非社会主義政権であるポーランド共和国が成立した1989年以降、ポーランドは1993年3月にNATO(北大西洋条約機構)に加盟し、2004年5月にはEU(欧州連合)に加盟した。東西冷戦後の国際社会に参加しながら、自由主義・民主主義への移行プロセスを歩んできたポーランドだが、現在、政治的な曲がり角に差ししかかっているといえる。

右派支持層の政治的態度

このテーマに関してしばしば語られるのは、「負け組になった労働者階級や貧困層が左派に失望し、外国人嫌悪や反移民を掲げる右翼や極右に流れた」とする説明である。ただし、このいわゆる「ゾンビ理論」は近年の政治学では否定されている。中・東欧を専門とする政治学者・中井遼は実証研究の結果を次のように整理している。

ヨーロッパの排外的ナショナリズムの台頭は、打ち捨てられた人々の怒りや苦しみの発露によるものではない。むしろ、多様な階層を含む文化的意識の問題である。人は、経済的利害ではなく非経済的信念によって政治的・社会的行動をとっている。このエビデンスを無視して、安直に、貧しさから来る怒りの表明などと説明する言説は、問題をわかりやすく一面的に切り取っているにすぎない。(中井 2021:12)

すなわち、右派政権が支持されているのは、移民によって自国の文化が損なわれるというアイデンティティ上の不安感を主因としており、欧州統合への反発もそこに淵源する。したがって貧困層・中間層・富裕層にかかわりなく、右派政権の支持は広範に分布している。とりわけポーランドでは、「キリスト教の堡壘でもあるポーランドこそが真にヨーロッパの価値を体現しており、ポーランドはこれら EU や西欧から、ポーランドの主権と伝統を守るだけではなく、ヨーロッパも守らなければならない」という、文化的・宗教的な語り口が観察される (ibid:211)。

こうした「EU と腐敗した西欧からポーランドを守る」という政治的態度は、むしろポーランドの歴史意識にもさかのぼって説明可能なものであるかもしれない。実際の現地フィールドワークにおいて、生徒がヨーロッパにおける「右派ポピュリズム」政党の台頭について、直接なにかを感じとれる場面はそれほどないが、とはいえ、第二次世界大戦以降のリベラルデモクラシーが動揺の兆しを見せるなかで、現代ポーランド社会の空気を感じる経験は、貴重なものだといえる。

ちなみに、ポーランド人ガイドの話によれば、ポーランド人は政治談議を気軽に交わすことを好む傾向がある。だから、注意深くさえあれば現代政治についての観察も不可能ではない (実際に執筆者も、ヴィエリチカ岩塩坑の観光ルートの途上、警備員とガイドが短い立ち話のなかで移民政策について議論している場面を目撃した)。

ポーランドでの食事

ポーランド文化を「体感する」という意味では、食文化を外すことはできない。最後にこの点についても軽く触れておくことにする。

旧市街の街歩きのなかでも、ポーランドのドーナツであるポンチキは、気軽に楽しむことができる食事である。中味はバラやブルーベリーなどの甘いジャムが入っている。ポーランド特有のファーストフードであるザピエカンカは、ピザトーストのような軽食で、こちらも気軽に食べられる。



ポンチキを食べる

ポーランドの家庭料理はレストランでも体験するチャンスがある。たとえば、ザウアークラウト（キャベツの漬け物）と生のキャベツを組み合わせて、肉や腸詰め、キノコなどを数日掛けて煮込んで作られるビグスというポーランド料理がある。酸っぱくて茶色で口に合わない生徒も多いが、「家庭の味」が多彩なのもポーランド料理の特徴であるため、先入観は厳禁であるかもしれない（Allen 2015:109）。

そのほか、ポーランド風の餃子であるピエロギ、ライムギを発酵させてつくられる酸味のあるスープのジュレック、ロールキャベツのゴウォンプキ、ジャガイモで作られたパンケーキであるプラツキなど、ひとつとりのものは旅行の間で楽しむことができる。帰国後の自由研究課題としても、ポーランド料理は人気のテーマである。



Bigos (ビグス)



Gołąbki (ゴウォンプキ)

ボルシチ作ってみた！！

◇材料(二人用)◇

- ・牛こま切れ肉 150g
- ・ニンジン 150g
- ・キャベツ 50g
- ・玉ねぎ 50g
- ・ごんじん 30g
- ・(a) 水 400ml
- ・(b) サラダ油 大さじ1
- ・(c) コーンメキシ 少々
- ・(d) 塩 少々
- ・(e) 酢 少々
- ・サワークリーム 大さじ1
- ・パセリ 適量

◇レシピ◇

- ①ニンジンを角切り、玉ねぎを薄切りにする。
- ②ピーズとキャベツを千切りにする。
- ③中火に熱したフライパンにサラダ油をひいて、牛こま切れ肉を色が変わるまで炒める。
- ④③のフライパンを弱火で熱し、バターを入れニンジンと玉ねぎがしんなりするまで炒める。
- ⑤ピーズ、キャベツ、牛こま切れ肉と(a)を入れて、全体が味がなじむまで煮込む。
- ⑥鍋に盛りつけて、サワークリームとパセリをのせたら完成。

自由研究ポスターの一部



Pierogi (ピエロギ)

6. おわりに

以上、教養総合「中世都市クラクフとアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」について、フィールドワークと授業内容との連動に注目しつつ、説明してきた。もっとも、記されるべきポイントはまだまだ多く残されており、本報告は十分なものとはなっていない。

とりわけ窪田教諭による、ポーランド語およびポーランド文化、あるいはアウシュヴィッツにかかわる児童文学紹介の取り組みなどのユニークな実践は、本報告では言及されていない。また生徒たちがこうした授業をどのように受け止めたかについての分析も、今回は踏み込むことはしなかった。本稿がきわめて限定的な記述にすぎないことは、あらためて強調しておきたい。

とはいえ、ポーランドという国が、歴史・地理・哲学・政治などさまざまな学習を深めることのできる、きわめて意義深い訪問場所でありうることは、これまでの叙述から垣間見ていただけるのではないだろうかと思う。授業担当者としても、日本社会を生きる私たちにとって、ポーランドが「教材」としてもつ可能性について、想像を超える豊かさを感じる場面は多かった。

その意味で、COVID-19 やロシアによるウクライナ侵攻の影響で、講座の停止が余儀なくされたことはきわめて残念であった。国際平和と安寧が早急に回復され、遠くない機会にふたたび本講座が再開できることを願っている。



主要参考文献

ポーランドおよびポーランド史に関するもの

- Gregory Allen、2015、「CULTURE SMART POLAND customs & culture」、Kuperard.
- 伊福部達監修・筒井信介著、2011、『ゴジラ音楽と緊急地震速報 あの情報チャイムに込められた福祉工学のメッセージ』、ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス。
- 伊福部達、2020、「緊急地震速報チャイム誕生の裏話 第12話「チャイム音にまつわる「縁」の連鎖ーアイヌの物語を中心にー」、<https://blog.bitis.co.jp/column-blog12>。
- 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編、1998、『世界各国史 20 ポーランド・ウクライナ・バルト史』、山川出版社。
- Zbigniew Iwanski、2016、「LEGENDS of KRAKOW」、PETRUS.
- イエジ・ルコフスキ／フベルト・ザヴァツキ、2007、『ケンブリッジ版世界各国史 ポーランドの歴史』、創土社。
- J・E・カウフマン／H・W・カウフマン、2012、『中世ヨーロッパの城塞 攻防戦の舞台となった中世の城塞、要塞、および城壁都市』、マール社。
- 衣笠太郎、2020、『旧ドイツ領全史 「国民史」において分断されてきた「境界地域」を読み解く』、パブリブ。
- 川越宗一、2019→2022、『熱源』、文春文庫。
- R・P・マルソーフ、1989、『塩の世界史』、平凡社。
- 中井遼、2021、『欧州の排外主義とナショナリズム 調査から見る世論の本質』、新泉社。
- 沼野充義監修、1996、『読んで旅する世界の歴史と文化 中欧 ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリー』、新潮社。
- 関口時正、2014、『ポーランドと他者 文化・レトリック・地図』、みすず書房。
- 高橋憲一、2020、『よみがえる天才5 コペルニクス』、ちくまプリマー新書。
- 崔善愛、2010、『ショパン 花束に隠された大砲』、岩波ジュニア新書。
- 渡辺克義、2001、『ポーランドを知るための60章』、明石書店。
- 渡辺克義、2017、『物語 ポーランドの歴史 東欧の「大国」の苦難と再生』、中公新書。
- 四方田雅史／加藤裕治編『中東欧の文化遺産への招待 ポーランド・チェコ・旧東ドイツを歩く』、青弓社。

ナチズム・ホロコーストに関連するもの

- アドルノ／ホルクハイマー、2007、『啓蒙の弁証法 哲学的断想』、岩波文庫。
- 東浩紀、2020、『哲学の誤配』、ゲンロン。
- リチャード・ベッセル、2015、『ナチスの戦争 1918-1949 民族と人種の戦い』、中公新書。
- ジョージ・M・フレドリクソン、2009、『人種主義の歴史』、みすず書房。
- 長谷部恭男・石田勇治、2017、『ナチスの「手口」と緊急事態条項』、集英社新書。
- 細見和之、2014、『フランクフルト学派 ホルクハイマー、アドルノから21世紀の「批判理論」へ』、中公新書。
- 井出明、2018、『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』、幻冬舎新書。
- 井出明、2021、『悲劇の世界遺産 ダークツーリズムから見た世界』、文春新書。
- 石田勇治、2015、『ヒトラーとナチ・ドイツ』、講談社現代新書。
- ベンジャミン・カーター・ヘット、2020、『ドイツ人はなぜヒトラーを選んだのか 民主主義が死ぬ日』、亜紀書房。
- 倉橋耕平、2018、『歴史修正主義とサブカルチャー 90年代保守言説のメディア文化』、青弓社。
- デボラ・E・リップシュタット、2017、『否定と肯定 ホロコーストの真実をめぐる闘い』、ハーパーBOOKS。
- 中谷剛、2007、『ホロコーストを次世代に伝える アウシュヴィッツ・ミュージアムのガイドとして』、岩波ブックレット No.710。

ピエール・ヴィダル＝ナケ、1995、『記憶の暗殺者たち』、人文書院。

プリーモ・レーヴィ、2019、『溺れるものと救われるもの』、朝日文庫。

佐藤卓己、2012、『現代史のリテラシー 書物の宇宙』、岩波書店。

リリアナ・セグレ、2021、『アウシュヴィッツ生還者からあなたへ 14歳、私は生きる道を選んだ』、岩波ブックレット No.1054。

芝健介、2008、『ホロコースト』、中公新書。

武井彩佳、2021、『歴史修正主義 ヒトラー賛美、ホロコースト否定論から法規制まで』、中公新書。

田野大輔、2020、『ファシズムの教室』なぜ集団は暴走するのか、大月書店。

田野大輔、2018、「アウシュヴィッツは「ホロコーストの代名詞」か？ 惨劇を理解するための5つのポイント」、
<https://gendai.media/articles/-/58355>。

新聞記事

「(インタビュー) 未来占う「言葉の時代」 ポーランド元大統領、レフ・ワレサさん」

(『朝日新聞』、2018年2月14日)。

「ポーランド、嘆く性的少数者 政権から敵視、大統領選の争点にも」(『朝日新聞』、2020年7月10日)。

「ポーランド大統領選挙、大接戦だったの？」(『朝日新聞』、2020年7月21日)。

「(インタビュー)「部外者」が伝える虐殺 アウシュヴィッツ公式ガイド・中谷剛さん」

(『朝日新聞』、2020年9月19日)。

「ポーランド、デモ拡大 中絶禁止判決へ抗議 10万人」(『朝日新聞』、2020年11月2日)。

「ホロコーストは「作り話」 オランダ若者の4人に1人」(『日本経済新聞』、2023年1月30日)。

(1) 山村 和世 (やまむら わせい wasei.r@hs.chuo-u.ac.jp)。1978 年 11 月 18 日、奈良県生駒市生まれ。中央大学附属中学校・高等学校教諭 (中学社会・地歴公民科)。2022 年度の担当科目：政治経済 (高 3)、教養総合 I (高 2)、教養総合 II (高 3)。

(2) 「教養総合」講座設置にいたる経緯を、記録をかねて書き記しておく。小杉校長 (当時) の諮問機関として、2015 年度から設置された「将来構想策定委員会」では、本校の教育理念、各教科のそれまでの具体的取り組み、学校の抱える諸課題等について広範な議論がなされた。教育内容面では、SSH 事業・SGH 事業の申請に向けた検討、高 2 次の研究旅行・高 3 次の特別授業等をカリキュラム上に有機的に統合する必要性などが議論された。

これを承けて、2015 年 12 月からは「将来構想実現委員会」(2015 年 12 月～2017 年 4 月) が組織された。将来構想実現委員会では、前委員会において議論の俎上に乗った諸課題の実践的推進を図るべく、分掌再編・部活動再編、中高大連携・カリキュラム再編・進級・進学評価基準策定などが議論され、それらの改革案が実行に移されていくこととなった。教育内容面では、とりわけ SSH 申請を具体的視野に入れつつ、学校設定科目として「教養総合」枠が設けられたことが特筆に値する。これによって既存の教科教育にとどまらず教科横断的に、自由かつ野心的な試みが可能となる環境整備がなされた。

高 2 次におかれた「教養総合 I」(2018 年度スタート、2023 年度からは「教養総合 II」に名称変更) の眼目のひとつには、従来、高 2 終わりの春休み期間に実施されることの多かった研究旅行を、正規のカリキュラム内に組み込むことがあった。これによって、1) 旅行に向けた事務的作業を授業のなかで消化していくことで職務負担の軽減を図る、2) 旅行でしか得られない「体験」と授業の相互効果によって深い学びにつなげていく、3) 体験ベースの課題に対する教科横断的なアプローチを教員側に促していく、などのさまざまなメリットが想定されていた。

ポーランドへの研究旅行というアイデアは、2018 年度の教養総合 I のスタートに向けて将来構想実現委員会の議論が進んでいるさなか、委員の一人でもあった本稿執筆者の山村が、京王観光株式会社・大場慎一郎氏と相談するなかで生まれたものである。また窪田教諭 (英語科) にポーランドへの短期語学留学経験があり、ポーランドおよびポーランド語への知識があったことから、「外国語×地歴公民」という教科横断の可能性も展望することができた。そして何よりも強制収容所・絶滅収容所への訪問は、教科書上の知識を実地で体験するという点で、きわめて魅力的なプランであると思われた。これらをふまえて、2017 年 12 月下旬の下見ののち旅行ルートを設定し、まずは旧カリキュラムであった 2017 年度高 2 学年の生徒たちが、2018 年 3 月末にポーランドへと旅立った。そして 2018 年度からは「教養総合」がスタートし、正式に本講座が発足することとなった。

(3) 5 年間のフィールドワークは下記のとおりである。

2017 年度 高 2 学年 2018 年 3 月 26 日 (月)～31 日 (土) 現地踏査実施

ルフトハンザ航空、羽田～フランクフルト経由～クラクフ

2018 年度 高 2 学年 2018 年 10 月 22 日 (月)～27 日 (土) 現地踏査実施

ルフトハンザ航空、羽田～ミュンヘン経由～クラクフ

2019 年度 高 2 学年 2019 年 10 月 21 日 (月)～26 日 (土) 現地踏査実施

ルフトハンザ航空、羽田～ミュンヘン経由～クラクフ

2020 年度 高 2 学年 新型コロナウイルス感染拡大により旅行中止

2022 年 3 月、長崎研究旅行 (国内代替旅行) 実施

2021 年度 高 2 学年 新型コロナウイルス感染拡大により中止

2021 年 10 月、現地クラクフと結んだオンラインツアー・オンライン講演を実施

2023 年 3 月、長崎研究旅行 (国内代替旅行) 実施

2022 年度高 2 学年 新型コロナウイルス感染拡大。ウクライナ侵攻により中止

2022 年 10 月、長崎研究旅行（国内代替旅行）・オンラインツアー実施

(4) 2018 年 3 月の旅行参加者は、総勢 58 名（男子 21 名、女子 37 名）であった。教養総合がスタートして以降の講座人数は 68 ～ 70 名で設定された。受講希望者は 70 名を大幅に超えることがほとんどであったが、やむを得ずセクションで 70 名以下の人数で旅行を催行するのが例年のこととなった。現地のアウシュヴィッツ＝ビルケナウ博物館では、公認ガイドとともに入館することが必須とされており、その人数が 30 名 + α であること、日程上 2 グループでの展開（アウシュヴィッツに行くグループ、ビルケナウに行くグループを前後半で分割）が限界であることから、講座人数の制限が設けられた。

(5) チャルトリスキ美術館所蔵のレオナルド・ダ・ヴィンチ『白貂を抱く貴婦人』はクラクフの至宝である。

(6) 現ポーランドのシロンスク地方は国民国家の境界領域にあたる。この観点からのシュレジエン史の試みについては、衣笠（2020）第 3 章を参照。

(7) 「アウシュヴィッツ・ビルケナウ——ナチス・ドイツの強制・絶滅収容所（1940-1945）」の正式名称は、ユネスコの世界遺産委員会において 2007 年に決定された。その背景には「ポーランドのアウシュヴィッツ」という通称によって、ホロコーストがナチス・ドイツではなくポーランドの主導によって行われたかのような歴史的誤解が生じかねないとのポーランド側の懸念があったとされる（中谷 2007：22）。このエピソードはそれ自体、第二次世界大戦をめぐる歴史意識の希薄化を示すものだろう。

(8) 講座内で視聴した映画作品には下記のものがある（部分的に視聴したもの、高 3 時の特別授業で取り上げたものも含む）。アラン・レネ監督『夜と霧』（1956）、クロード・ランズマン監督『SHOAH ショア』（1985）、スティーブン・スピルバーグ監督『シンドラーのリスト』（1993）、マーク・ハーマン監督『縞模様のパジャマの少年』（2008）、マルガレーテ・フォン・トロット監督『ハンナ・アーレント』（2012）、アンジェイ・ワイダ監督『ワレサ 連帯の男』（2013）、デヴィッド・ヴェンド監督『帰ってきたヒトラー』（2015）、ミック・ジャクソン監督『否定と肯定』（2016）、ロベルト・シュヴェンケ監督『ちいさな独裁者』（2017）。

(9) 図書館がホロコースト否定文献をどう扱うべきかというアボリアについても、授業内で言及することがある。社会学者・佐藤卓己によれば、アメリカ図書館協会評議会の「図書館の権利宣言」においては「党派あるいは主義の上から賛成できないという理由で、資料が閉め出されたり取り除かれることがあってはならない」とされているものの、この「図書館の知的自由の原則」にアボリアをつきつけるのがこの問題であるという（佐藤 2012:59-65）。佐藤は同時に、アイゼンハワー大統領の演説「国民が共産主義の教えを知り、それが広まる理由を把握しなければ、アメリカは共産主義を負かすことはできない」という立場をふまえて、自身の見解を明示している（ibid:63）。

(10) 強制・絶滅収容所に関する講義においては、ゾンダーコマンドの存在についても触れる。ゾンダーコマンドとは大量虐殺の任務を担わされた、ユダヤ人の特別労務班員である。中谷剛『ホロコーストを次世代に伝える』でも、「我々は SS から宣告を受けた。いずれは全員殺される」と感じた彼らは、それなら一日でも長く生きてやろうという生理的欲求に従った」と記述されている（中谷 2007:6）。ちなみに中谷（2007）は本講座での指定テキストである。2022 年度はセグレ（2021）もテキストに指定した。

(11) プリーモ・レーヴィは「理解」をめぐる次のように自問する。それはエマニュエル・レヴィナスの他者論とも接続するものだろう。「私たち生き残りは自分の経験を理解し、他人に理解させることができたのだろうか。私たちが普通「理解する」という言葉で了解していることは、「単純化する」という言葉と一致している。根本的な単純化がなされないなら、私たちの世界は際限のない、不明確なもつれあいとなり私たちの方向感覚や、行動を決める能力はおびやかされるだろう。要するに私たちは認知可能なことを図式化するよう強いられている。……／この単純化を望む「希望」は正当なものであるが、単純化自体は常

にそうであるわけではない。……大部分の自然現象、歴史的現象は単純ではない。あるいは私たちに好ましい単純さを備えたようなものではない」(レーヴィ 1986=2019:42-43)。

(12) 1942年1月のヴァンゼー会議で、ユダヤ人の追放から絶滅(「最終解決」)へと政策転換が話し合われたことにより、絶滅収容所での計画的な大量殺戮が追認されていく(芝 2013:155-161)。この会議についてはマッティ・ゲショネック監督『ヒトラーのための虐殺会議』(2022)で近年の研究成果をふまえて映画化されており、国家保安本部長官ラインハルト・ハイドリヒを補佐する、親衛隊中佐アドルフ・アイヒマンの役回りはとりわけ興味深いものである。